

小林守城

二年半が経過して、いまなお自分とのかかわりがよく整理できない。そのためにも詩を書き続けていかねばならないと思っている。人災としての原発震災が、決定的に重い。生活や生き方、考え方にどのような変化があったのか。今言えることは、(大げさは承知のうえだが、)「未来世代との共生」を問うならば科学者の倫理が問われているように、言葉の文芸に関わって、価値としての言葉を次の世代に残したい、伝えたいということからくる、いま文芸に関わる者の倫理的責任があるはずだ。過去を問うならば、かつて市民政治家であった社会的責任を自ら問うことでもある。無力無念の憤りがやり場のなさとなって自分の文芸へのあり方や日本の政治や官僚制そして揺らいでいる市民へと向かう。民主党政権が決定的に崩壊したことは必然であって、再生への道は険しすぎるくらいだが、日本がなお核エネルギーへの依存を悪魔的に継続しようとしていることは未来世代への裏切りであるとして、党派を超えてたたかいを継続しなければならない。そして、「まだ絶望を語る時ではない」と、山口二郎が「政権交代とは何であったか」(岩波新書)で云っている。希望をなんとか見つけてみよと言う気もちにさせられる。組織的な諦めが無言に蔓延してゆく市民社会に、夢であっても、理想であってもいい、未来への責任のために希望を組織するしか政治や文学の道はないはずだ、やってみるしかないのだ。言葉への信頼をもう一度作りだしていけるか。いま言葉の文芸は、宗教や美学よりも科学的・社会的知見を背景にしてこそ、信頼と力になりうることを再認識すべきだろう。近代の自我は「未来世代との共生」の方向に超克していかねばならない。閉塞された現代の自我の文学は、さらに小市民として社会的に重力崩壊し、無害な諦めの独りごとを残しているに過ぎないのではないか。そこに宮沢賢治が核化学者・高木仁三郎と共に再出場する必然がある。未来への責任が、世界の全体幸福が、世界的なテーマになって、核文明からの脱出が迫られていると考える。核エネルギーの文明に人類の未来はないと、わたしも考えをさらに固めている一人である。